橋本行弘選手
日本スポーツ賞受賞

去る1月29日、読売新聞社制定の第42回日本スポーツ賞が橋本行弘選手に授与されました。

当協会として個人で受賞された方では5人目となります。日本スポーツ賞は競技界に貢献した功績、人格など最優秀として選定された選手に授与される権威ある賞であります。栄えある賞を受賞された橋本選手に心からお祝いを申し上げます。

同選手は1984年愛知県岡崎城西高校を卒業、本田技研入社、同年にはナショナルチーム入りを果たし、その後の活躍は皆様ご承知の通り、公式国際試合110回を達成。この間、各種大会に於て数多くの賞を受賞して居られます。

現在は男子ナショナルチームのキャプテンとしてアトランタを目指すチームの要として活躍中です。

この受賞を機に一層のご活躍をお祈り申し上げます。

世界学生ハンドボール選手権大会観戦記

全日本男子ナショナルチーム監督　蒲生晴明

1、はじめに

バルセロナオリンピックも終り、次回'96アトランタオリンピックを目指して、各国とも強化のスタートを切っております。その中で今回、東西の冷戦が終結したばかりのロシア―ペテルブルグ（旧レニングラード）で開催された第12回世界学生ハンドボール選手権大会に全日本学生チームが出場するということは大変意義深いものがありました。そして、この大会にナショナルチームの監督として帯同できたことは、全日本学生連盟の皆様、日本協会関係の皆様の一方ならぬご理解とご支援の賜物であり、感謝いたしております。この場をお借りして御礼申し上げます。

2、大会を観戦して

今大会に出場したメンバーは、'94広島アジア大会金メダル、'96アトランタオリンピック出場を目指す我が全日本チームにとって、貴重な戦力であり、そう言った意味で注目をしておりました。また、アベレージ年齢が21才ということは、爆発的な力を発揮でき得る年齢であり、この時期に世界選手権をアジアではないヨーロッパで体験できることも、これまた非常に良い経験になるところです。私も、帯同していてワクワクする思いでした。

大会に入り、予選ではルーマニア・オーストリア・トルコと対戦があったわけですが、どのゲームも善戦するけれども最後に引き離される展開になり、選手達のスタミナおよび国際経験不足といったものが感じられました。しかしながら、選手達は、少ない期間にハードなトレーニングを積み重ね、その成果は少なからず発揮しておりました。日本が世界を相手にして、勝機を見出だすためにはスピード・テクニックで挑み、ミスの少ない攻防をすることが不可欠です。この意味では、トータルで見るとミスが多いものの、局面局面で見ると大変良いプレーができていたと思っています。とかく、結果で判断がされるところですが、国際経験が皆無のものもいる中で、対戦相手は国際ゲーム１００回以上を超えるものばかりであります。選手達は、自分自身のできる限りのものを出して正々堂々とゲームしておりました。身体を張って、怪我を押しながら対戦した選手達に拍手を送りたいと思います。ゲームの内容や成績については、選手団スタッフの方々からご報告があると思いますので、私としての観戦内容は以上としたいと思います。

一番大切なことは、「選手達がこれからどうするか!」であります。また、この選手達をどのようにバックアップしていくかであり、次に今後の強化について、述べさせていただきたいと思います。

3、今後の強化について

ナショナルチームは、日本ハンドボール界・関係役員、選手、ファンを含めた全体の代表チームです。そして、このチームが戦って勝つことを皆さんが望んでいるはずです。その意味で、日本国国旗を胸につけ諸外国と対戦する選手達に最高の環境下でトレーニングを積み重ねさせることが大切です。それが選手達の励みになり、プライドを持たすことができて、ステイタスシンボルに繋ることと思っております。ナショナル選手を多くの子供達が間近で見て、テレビで観戦して「僕もハンドボールの選手になりたい!」と思っていただくためにも、環境を作ることが大切であると考えております。環境と言っても様々なことがあると思います。

ここでは強化の当事者として、新強化体制について別表のとおり紹介してご理解をいただきたいと思います。別表は、現在の男子ナショナルチームの強化体制であり理想の体制です。しかしながら、まだまだ未完成であり、これから構築していくべきことでもあって、現在進行中です。この体制がベストであるとは思っておりません。ぜひ、ハンドボールを愛好しておられる皆さんから、どんなことでも結構ですのでご意見などがありましたならば、アドバイスをお願いします。なぜならばナショナルチームは、皆さんのチームだからです。ハンドボール界の皆さんのこういったご支援が、どのようなものより選手を奮い立たせるでしょう。皆様の今後のご支援とご協力をお願いします。

4、おわりに

以上、世界学生選手権大会の感想とナショナルチームの強化の一部について述べましたが、多くの皆様に見てもらえるようなゲームができるように、選手達とスクラムを組んで日常の訓練を計画的に実行して一つ一つ成果を上げていきたいと考えております。'93年は、下記3点のスローガンをもとにトレーニングを実行していきたい思います。

＊Ｃｒｅａｔｉｖｅ Ｔｈｉｎｋｉｎｇ（創造し、考える）

＊Ｒｅａｌ Ａｃｔｉｏｎ（実際に、行動する）

＊Ｂｅ Ｓｕｃｃｅｓｓｆｕｌ（成果・結果を出す）

皆様方のご支援よろしくお願いいたします。

世界学生選手権大会報告

監督　松井　幸嗣

12月13日から19日までの7日間、ロシア連邦共和国、サンクト・ペテルブルグに於いて、第12回世界学生ハンドボール選手権大会が開催された。日本からは、中沢重夫団長以下、役員3名、ドクター1名、帯同レフェリー2名、選手14名が参加した。また、全日本男子チーム監督である蒲生氏にも随行していただいた。選手は9月上旬に選考合宿で選ばれた14名（社会人1名、4年生9名、3年生2名、2年生1名、1年生1名）であり、チーム強化の合宿は、インカレ終了後の11月18日から24日までの1週間行った。

12月6日、成田空港を出発し、7日午前、サンクト・ペテルブルグに到着した。大会初日までの1週間、日本の合宿でやり残してき

た事や、コンビネーション練習、或いは地元大学チームとのトレーニングマッチを2試合、さらに今大会に出場するオーストリアチームとのトレーニングマッチを2試合行ない、大会に臨んだ。

今大会は当初、出場8ヶ国を2グループ、A（ロシア・オーストリア・イスラエル・中華台北）、B（ルーマニア・ハンガリー・トルコ・日本）に分けて、それぞれリーグ戦を行い、上位4チーム、下位4チームに分かれトーナメントで順位を決定する方式であったが、大会直前にイスラエルの不参加やハンガリーの到着が一日遅れるなどの理由で、大会前日のミーティングに於いてグループのチーム入替えが行われ、その結果Aグループのオーストリアと Bグループのハンガリーが入れ替わった。オーストリアとは予選リーグで対戦しない為に、すでにトレーニングマッチを2試合行い、さらに予選リーグではハンガリー戦に標準を合わせていただけに、日本にとっては最悪の結果になってしまった。選手たちも精神的動揺を隠しきれない様子であったが、与えられた条件の中で全力を出しきれるように話しをして初戦を迎えた。

★12月14日〈第1戦〉

日本 14 〔8−13 / 6−12〕 25 ルーマニア

試合開始29秒、ルーマニア14番のロングシュートで先行される。日本の最初の得点は6分、冨本のロングで1対3、ルーマニアは日本の積極的なディフェンス（開始7分くらいに14番にマン・ツー・マン）に早めに攻撃をつぶされ、なかなか得点が伸びず、日本も佐藤のポスト、小沢のランニングシュートで得点するが、23分に中野、26分に森本の退場で前半8−12で終了する。後半に入り両チームとも5分間得点がなかったが、日本は岩本のステップで10−14、ルーマニアの2番の失格で追い上げムードに入ったが、相手退場の時にミスが続き、得点出来ず。また、日本も17分に佐藤、18分には森本が退場してルーマニアに連取され、14−25で終了する。

★12月15日〈第2戦〉

日本 15 〔10−17 / 5−19〕 36 オーストリア

11月のオランダで行われたハーレム大会で優勝したメンバーが5人抜けたチームであり、今大会の優勝候補No.1のオーストリアチームとの一戦である。

日本は開始早々からペナルティー、サイドのシュートミスが続いたが、GK長嶺の好守もあって10分まで森本のサイド、佐藤のポスト、松原の速攻などで互角に戦う。その後は中野、佐藤、冨本の警告などでディフェンスに積極性がなくなり、また、攻撃でも単調になるが、冨本・森本らの得点で前半は10−17で終了する。後半に入るとオーストリアは積極的に前につめるディフェンスで日本の攻撃をシャットアウト、そのボールを逆速攻につなげて次々に加点していった。日本は単発シュートが多くなり、ディフェンスでも簡単に1対1を抜かれる悪いパターンで、結局15−36の大差で完敗する。

★12月16日〈第3戦〉

日本 16 〔7−14 / 9−9〕 23 トルコ

前半53秒、トルコのポストシュートで先行されるが、日本も2分松原のシュートで同点とする。トルコのパワーあるポストプレーで2−5とされるが、日本も岩本のロング、日原の速攻で加点するが、13分、森本の退場でペースがみだれ、7−14で前半終了。後半に入り2分、松原が負傷退場し、その後入った森岡、広政、中野らの4連続得点で14−19と5点差に追い上げ、日本のペースで進むが、前半の7点差が大きく16−23で敗れる。

★12月17日〈第4戦〉

日本 20 〔8−12 / 12−10〕 22 中華台北

両チームとも体格、体形、そして攻・守ともに似たチームであり、日本にとっては対戦しやすいチームである。

先取は台北のポストプレー、日本も森本のサイド、冨本のロング、荒木の好守などもあって20分、6−6の同点。しかし、21分に森本、佐藤と2人の退場で3連続失点をする。その後、森本のペナルティー、森岡のサイドで得点するが、前半は8−12で中華台北リードのまま終了。後半に入り岩本の3連続得点で1点差まで追い上げるが、15分、冨本の負傷退場で中華台北のペースになり、結局最後まで日本のペースにならず、20−22で敗れた。

★12月19日〈第5戦〉

日本 25 〔14−12 / 11−18〕 30 トルコ

この試合で5点差以上の点差で日本が勝つと、日本の5位が確定する大切な一戦である。

開始早々、日本は冨本のロングで先行する。前半10分まで完璧な日本のペース、岩本のロング、木浪の速攻などで7−1、さらに佐藤のポストなどで15分までに10−3と大きくリードする。しかし、トルコもパワープレーでポスト、ミドル、サイドなどで4連続得点し、20分には10−7とするが、GK長嶺の好守、森岡、岩本らのシュートで加点し、前半14−12で日本がリードして終わる。後半に入り、岩本、森岡らの活躍でリードを保つが、6分に中野が退場し、ディフェンスのリズムが崩れ始めた所を攻撃され、12分には同点にされる。その後、一進一退のシーソーゲームが続くが、日本は大事な所でのミスが続き、逆にトルコに連続得点を許してしまう。結局、

25－30で敗れ、5位確保の夢は破れてしまう。

＊　＊

全日程が終了し、優勝はオーストリア、2位・ロシア、3位・ハンガリー、4位・ルーマニア、5位・トルコ、6位・中華台北、7位・日本という結果であった。

今回私自身も初めて国際大会に監督という立場で参加させていただいた訳であるが、反省点や今後の課題など、多くを勉強することができた。一番の反省点は同じアジア地域にある中華台北に敗れたことである。反省するところはしっかり反省点としてとらえ、今後に生かせるような指導、練習の必要があると痛感させられた。また、4年生の大部分が実業団でプレーをすることになっているので、今回の大会を良い経験にし、ステップにしてナショナルAチームでプレー出来るよう頑張ってもらいたいと思う。

今後の課題については、大会期間中、特に感じたことは、日本の選手は技術的な部分では決して外国チームに劣っているとは感じられなかった。強引なパワープレーで押し込まれるようなプレーでの敗れ方が多かったと思う。基礎技術をしっかり習得し、日本人特有の「器用さ」をトレーニングすることによって、対等に試合ができると感じた。

最後になってしまいましたが、今回の遠征で体調を崩したり、負傷者を試合に支障なく回復させていただいた、渡辺ドクターにお世話になりまして、有難うございました。

体験記

主将　佐藤壮一郎

今回の遠征メンバーは、実業団からは私1人と大学生13人である。私は最年長と言うこともあり、初めての経験であるキャプテンを任され、責任の重大性と期待に胸を膨らませ、ロシアに出発した。開催地がロシアなので環境の変化が一番問題であったが、思った通り大会中に風邪や下痢をする者が多くいた。

だが、このようなことは自己管理がしっかり出来ていれば簡単には起きず、また代表選手として自覚しなければならない点であった。ナショナル選手クラスになると、風邪を引くと個人的にペナルティーを与えられる為、暴飲暴食や睡眠時間などに気を配り、代表選手としての重みと個人がチームにおける重要性が理解出来ていると考え、学生であっても日本代表である以上やるべき行為であったと反省している。しかし、ゲームに負けた理由は、これだけではない。今大会における世界との違いを私なりに考えてみた。一つ目は、体格と当りの違い。実業団ならともかく学生になると当りの違いを痛嘆させられ、外人には勝てないと思い込んでしまうこと、二つ目は、DFでのフットワーク。必ずベタ足にはならず足と手を動かし、ボールに対して移動していた。このようなフットワークは、体格の小さい日本選手こそ、怠ってはいけないと私は思った。三つ目は、リバウンドやルーズボール。1点を取るどん欲さなどが目立った大会であった。その他では、選手達の所属チームでのDF体系やOFパターンの違いで、選抜チームになった時の統一性。三つの項目については、簡単そうであるが怠りがちな行為であり、基本であると思う。やはり、常日ごろからの練習で、筋力トレーニングや当りの練習、フットワークを重視して、DFでは、足や手を止めない。ボールに対する執着心とシュート1本の重みを感じて、鍛練しなければならないと私を含めて感じた。その他で述べたように、選抜チームの場合、ハンドボール知識が異なり、また短期間でチームを作らなければいけない為、基本知識は統一しておくべきだと思うので、大学生などを集めた練習会を数多く行えば良いと思いました。今大会での成績は良くなかったが、私も含めてほとんどの選手が実業団でこれからプレーするので、世界学生選手権大会での経験を生かして頑張って行きます。それから、今大会に御協力して下さった方々に、心よりお礼を申し上げます。

森本彰宏

この大会はほとんどが背の高いチームとの戦いで、合宿の練習でもロングシュートを打たれないようなディフェンスをしていました。試合でも第一戦はルーマニア、第二戦はオーストリアと大型チームだったので、台湾戦の時は、松井先生も「台湾は今までのチームと違い、背たけも低いし攻めに関してもロングシュート中心ではなく日本のチームとよく似た形になるから、攻めや守りは切りかえるように」と言われていました。

台湾戦の前日も、みんなの中に勝てるという意識が強かったせいか特別に話はしませんでした。

前半いきなりポンポーンと3点先取され、自分たちもとり返せるという余裕が最初のうちはありました。でもディフェンスをしていても守れているんですがちょっとしたスキをつかれてしょうもない点を与えたり、攻めていてもシュートミスのあとの返りが遅かったり、チェックができていないなどで逆速攻を簡単にやられたりで、普通なら点差をあけて勝っていなくてはいけないのに今みたいな理由で、取って取られて取られて取ってという感じでなかなか前半のはじめに取られた点が縮まりませ

んでした。みんなもなかばぐらいからあせりだしてきたのですが、そのあせりがよけいにプレーに影響して点につながらず、自分もあせるなとみんなに声をかけ、自分にも声をかけていました。結局、前半はそのまま追いつけず、4点差をつけられたまま終わり、自分もみんなも信じられないといった感じで呆然でした。

ハーフタイムで先生方からカツを入れられて、後半声を出し合っていったのですが、変な所に力が入り、シュートでも難しくないものをはずしたり、ディフェンスをしても警告になったりペナルティーになったりで、いつもの自分達らしさというものが全く発揮できませんでした。そのままずるずると試合が進んでいき、2点差で負ける結果になりました。

今から思えば、台湾戦を前にして心のどこかに絶対に勝てるという潜在意識があったため、前半に連続失点された時に切りかえられなかったのが原因だったと自分は思いました。この大会はほとんどが自分達とレベルの近い台湾に対しても、レベルの高いチームと同じように試合が運べたら、と思いました。

木浪達文

第一戦のスキフ体育大については、前半は点数を取られても、すぐに点数を取り返してけっこう良いムードでゲームをやっていました。後半になっても、前半みたいにシーソーゲームをやっていましたが、ディフェンスをして、マイボールになって、ここで1点を取ったら気持ちが楽になると思う時に、必ずと言っていいほどに、パスミスとかキャッチミスとかが出て、相手ボールになってからの速攻で点数を取られてしまう場合が多かったです。そういうミスが失点となり、4連続失点になり、チームのムードも沈んで行ってしまったと思います。

自分自身、ディフェンスしか出ていないので、オフェンスのことはベンチから見ているだけですが、けっこういい形で攻めていると思います。オフェンスで出ている人達が、足を止めないで、みんなが強気で攻めている時は、いいプレーが多く出て得点出来るチャンスが出てきます。しかし、足が止まっている時は、パスミス、キャッチミスが多く出てきます。即席のチームだからプレーが合わないのは仕方がないと思いますが、声を出したりしてプレーなどをすれば、パスミス、キャッチミスなども減ってきて、失点も少なくなると思います。

ディフェンスでは、相手に対しての当りが弱く簡単にシュートを打たせてしまったと思います。相手は外人で日本人より体格がよく、それにパワーも違うので、へたに当りが弱いと、こっちの方が怪我をしてしまいます。それに9～10メートルからフリーでロングシュートなどを打たせると簡単に点数を入れられてしまいます。ディフェンスでは常に9メートル以上前に出て、相手オフェンスの人にプレッシャーをかけて、当りを強くしていきたいと思います。世界学生が始まると、もっともっと強い当りが必要になると思いますので、今まで以上に強い当りをしていきたいと思います。

今後、この世界学生選手権で学んだ数々の経験を大学でも生かして、また、自分のチームの人達にもこの経験を話していきたいと思います。そして、日本国内でのハンドボールを考えるのではなく外国人にも通用するハンドボールを考えていくような選手になりたいと思います。

中野一隆

スキフ体育大学との第一戦の反省は、単純なミスが多すぎること。例えば、キャッチミス、パスミスなどゲームの流れをつかめるところでのミスが多すぎるため、相手チームにムードが傾いてしまうという悪循環につながってしまうのです。もう一つは、もっとそれぞれが積極的にプレーしようということである。それぞれが声を出し、ひたむきにプレーしようということである。

12月10日、スキフ体育大学との第二戦。第一戦において課題として残された、単純なミスを減らすこと、積極的なプレーを心がけることを目標として、この試合に臨みました。

試合は、第一戦の反省が生かされ、みんなそれぞれが積極的にプレーを展開していた。みんな声を出し、それぞれゲームをしていて楽しく、おもしろかったと思う。こういう時の日本は、外国のチームにも充分通用するんだなと思ったと思う。前半のゲームの内容はすばらしかったと思う。しかし、後半になると、なぜかみんな足が止まってしまい、声が出なくなり、なんと連続10失点してしまった。原因としては、前半のできのすばらしさに満足してしまい、後半も余裕で勝てるだろうと気の緩みが出てしまったのではないだろうか。真にこれ一つにつきると思う。しかしながらただ単に、日本がちょっとリズムが狂っただけで、それにつけこんでくるスキフ体育大学の勢いというものはすさまじいものがあると思う。ここでもう一度、第一戦での反省が生かされていないことに気づいて、だれかがこのムードを、打ちけさなくてはならないのに。まだそこまでチームは完成していない事を、さらけだしたようなかっこうになってしまった。この連続10失点の内容は、や

はり、ミスからの得点が多く、前半とはまるで違うチームに変わってしまったようだった。
　結局、第二戦は前半あれだけ押していながら、後半の連続10失点のダメージが大きく、惜敗してしまった。しかし、またゲームをしたことによって、新しい課題が残った。ムードが悪くなった時、どうすればいいのかということである。苦しい時こそ、がんばって声を出し、調子のいい時以上に声を出すこと。これにつきると思う。大会がはじまる頃には、すばらしいチームになっているのではないかと楽しみにしている。

松原晋哉

　予選リーグの3日目はトルコ戦であった。すでに2敗している我々日本チームは、なんとか1勝をとアップから気合いも入れて試合に臨みました。
　前半が始まり、ひらきなおって戦ったのがよかったのか、一進一退の攻防が続きました。考えてみれば、ロシア遠征にきてから外国人と試合（練習試合含む）はこれで8回目ということで、慣れもあったように思いました。
　しかし、前半のやまが2、3ケ所ありながらも、簡単なキャッチミス、パスミス、シュートミスが逆速攻へとつながり、じわじわと点差を開かれていきました。
　この遠征にいく前に何度か日本で合宿をした時に、ミスなどを十分注意し、ミスしたら走って戻り、ディフェンスでガンバレというような事を何度も言われていました。
　それが、このような結果になるとは、もっと意識していればよかったなぁと思いました。結局、後半も前半の点差をかえす事が出来ず22対16で3敗目を喫しました。
　やはり、こういった国際試合では、外国人選手とのパワーの違いなどにとまどいがちでうまくいかない面が多々あったので、もう少し外国人選手との試合をして慣らしていればもっといいゲームが出来たと思います。

鎌田照幸

　セットOFを大きく二つに分けると、組織的（戦術的）な突破による得点方法、個人的（1対1）な突破による得点方法に分けられる。
　今回の日本のセットOFにおいては、いくつかの組織的な動きによる得点方法にたよるほか、あまり個人的な突破による得点は望めなかったため、動きを相手に読まれるパターンが多かった。
　それは、明らかに外国人選手との体格の差、パワーの差に現れている。組織的な動きによる攻撃がスムーズに行っている時は、足もよく動き、6人全員がシュートをねらい、いい攻撃になり得点に結びつく形が出るが、いったん動きを読まれだしてくると、皆足がとまり、消極的な動きに変ってしまい、ミスにつながる。この読まれてしまった時こそ、センタープレーヤーの能力を発揮しなくてはいけなかったが、私にはその能力が足りず、チームを盛り上げるだけの力がなかった。
　逆に、世界のセットOFについてだが、世界といってもいろんなタイプがあり、一つにまとめることはできないが、今回優勝したオーストリアについてみると、個人的な突破方法と戦術的な突破方法がうまくかみ合っていた。
　6人全員が、一つ一つの強い個人突破をねらいながら、戦術的な動きになり得点にいたるので、困った時に6人だれもが、どこからでも得点できるチームだった。
　日本が世界を相手に戦うには、あたりまえだが、60分フルに使える戦術的な動き、一人一人の突破能力、あとは相手のミスを得点に結びつけられるだけの速攻力をつける必要があると実感した。
　本遠征において、計9試合を行ったが、日本とはDFのあたりも違えば、OFにおけるシュート力も違う。これはやはりなれるしかないと思う。日本は、外国との試合も限られているので、もっと若いうちからたくさん遠征を行い、世界のハンドボールになれる必要があると思う。そうすれば必ず世界で勝っていけると思う。

冨本栄次

　日本と外国人、特にヨーロッパ人とは、体格、パワーともに日本人が劣っているので、それを日本がどう克服するかが今回の課題となっていた。予選一日目、ルーマニア戦についてはどうだったか。
　ルーマニアは、前回大会において準優勝したチームで、実力的には日本より上であるが、それをカバーする闘争心を前向きに出していけばいい試合ができるのではないか、という気持ちで試合に臨んだ。
　前半立ちあがり、ルーマニアは14番のエースが打ち込むという型で攻めてきたが、日本もパターンからのきっかけを利用し、全員がシュートを狙い、いい型で点が取れ、互角の立ちあがりをしたと思う。
　前半の中ごろから日本チームに少々ミスが出てきた所を、ルーマニアに連続得点を許しゲームの主導権を握られるが、日本も必死についていき、なんとか前半を13対8のルーマニア5点のリードで折り返した。
　ハーフタイムに松井先生が「このぐらいで満足しちゃだめだ。いいゲームをしても、勝たなければしょうがない」といわれた。実はこの言葉が、ゲームが終了してから重く感じられた。満足していな

いつもりでも、心のどこかでそういう気持ちがあったのかもしれない。

ルーマニアに、日本の攻撃パターンを読まれだした時から急に足が止まり、全員といっていいほど消極的になり、シュートを狙わずパスばかりするようになった。そうするとミスが目立つようになり、それをルーマニアに得点され、ずるずると離され、25対14の大差で負ける結果となってしまった。

やはり、日本人が外人とゲームをするときは、闘争心、パワーでは負ける部分を頭を使い守り、攻める事、スピードで負けない事などが勝つ為に必要な事になってくると思うが、ルーマニア戦については、前半でしかその事を実行できなかったと思う。

自分自身の反省としても、後半、消極的になりシュートを打ちにいかなかったとか、反省すべき点がたくさんあるので、この経験をいかしていきたいと思います。

「本当に外人はすごかった」というのが素直な気持ちです。でも、この大会に出場できてとても光栄に思います。

小沢勝利

予選リーグで対戦したトルコとは、前半で一進一退の攻防が続いたが、トルコが日本のミスにつけこんで確実に点を取り、14－7で折り返した。後半に入ると、トルコは着々と点を取ったのに比べ、日本学生選抜も点を取るが、前半のダブルスコアが響き、結局22－16と敗退してしまった。

このことがあって、トルコの手の内を知り尽しての順位決定戦での再戦となった。前半、チームが一丸となり、岩本さんのシュートが連続して入る。岩本さんに続きみなさんのシュートも入りだして、なんと7点差までひらいた。自分はベンチで座っていて、得失点差で5位になれると思いましたが、外国人選手はそう甘くなかった。全日本学生のちょっとのスキをつき、トルコは点数を重ね、前半を終ってみると14－12の2点差まで縮まっていました。後半に入り、全日本学生が先取点を取り3点差。残り10分まで点の取り合いで3点差が続き「勝てるぞ」と思いましたが、なぜかトルコのディフェンスがよくなり、全日本学生がミスをしだし、同点、そして逆転されてしまいました。

敗因は、前回のトルコ戦と同じく、ミスで負けたものです。結果的には負けてしまいましたが、いい試合だったと思います。このトルコ戦のような試合を第一戦からやっていれば、もっとよい結果になったと思いました。

この大会を振り返って、外国人選手のパワーのディフェンスや、オフェンスで全日本学生が負けてしまい、やはりこういう世界大会にはもう少し外人慣れと、国内での合宿をしたかったと思いました。再来年、またこの世界学生選手権の代表に選ばれたら、今回の経験を生かしてがんばり、そして5位以上を狙いたいと思います。16日間、お疲れ様でした。

日原正和

試合では、主にディフェンスとして入ることが多かったので、日本のディフェンスや各国のディフェンスについて感想を書きたいと思います。

ディフェンスの形態としては、各国とも1対2対3ディフェンスが主流で、ロシアとオーストリアがワンポイントで一線にしていました。ハンガリーだけが一線だけで、キーパーと合わせて相手にロングを打たせていました。3位決定戦では、それでルーマニアのエースを上手く封じていました。

同じ1対2対3でもそれぞれタイプがあり、ルーマニアは1人1人がそれぞれのマークを守るという感じで、ブロックプレーやクロスプレーに弱かった。逆にロシアはポストがいる方の45度プレーヤーはフルバックと合わせて低く守っていたので、早いタイミングでロングを打たれると守れないケースが多かった。

自分がプレーしていて感じたのは、日本では、フォールディングでフリースローの笛が鳴ると思ったとき、攻撃側のプレーヤーは動きを止めてしまうが、外国人はそれからでも押し込んできます。レフェリーがアドバンテージをとっているか、もしくは少しだけ流してしまったときには、うしろから巻いてしまう形になり、警告処分となることが多くありました。

それに、外国人は日本人に比べてシュートモーションが早く、ディフェンスとしては、打つと思った瞬間に当たりに行ったり、枝にあてようと思ったのでは遅く、阻止することができません。外国人同志の場合ではやはり上から打たせて、キーパーと合わせていました。日本人は上背がないので、やはり運動量を増やし、プレーの先を読んでプレーすることが基本的な事であるのだけれど、外国人に対するには大事だということを実感しました。

あと、他の国の選手は自分がファウルをして、自分に非があると思えばすぐに手を上げます。逆にそのジャッジに不満のあるときはぎりぎりまで抗議します。そういったレフェリーとのコミュニケーションも日本選手より外国人選手の方が上手であったと思います。

岩本真典

予選B組のハンガリーがA組のオーストリアと変わったので、オーストリア戦について書きたいと思います。オーストリアとは、予

選リーグが最初違っていたので、大会に入る前に二度、練習試合をやりました。

　オーストリアは先の世界選手権のメンバーがほとんどで、体格、技術的にも日本をまさっていました。練習試合では25対40と13対29と大きく差を広げられましたが、二度対戦している分、攻撃方法、守備態形も分かり、大会予選二試合目で緊張もとれ、楽に試合に臨めたのですが、私はかぜをひいてしまい万全の体調で臨めなかったのが残念でした。

　試合は立ち上がり互角となったのですが、じりじりと日本のディフェンスのラインがずれている所をつかれ、離されていきました。日本もパターンを読まれながらも必死にくらいついたのですが、前半10対17で折り返すことになりました。

　ハーフタイムのスタッフの指示は、オフェンスで積極的に前をねらう、ディフェンスのラインを合わせる、速攻のつなぎを小さく速く、ボールを展開した逆があいている、などが挙がり、点数は気にせずぶつかっていこうと話し合いました。

　後半に入ると、オーストリアのサイドシュート、ロングシュートが決まり出し、日本のディフェンス態形をくずされていきました。攻撃もシュートで終われず、パスミスなどで逆速攻と、日本が逆にやらなければいけないことをオーストリアにやられ、点差はひらいてしまいました。

　後半の最後は、いつも言っている最後までプレーが、少し欠けてしまい、結局15対36で敗れてしまいました。スタッフには試合終了後、今までオーストリアとやった中で、最悪のゲームだと言われ、自分もロングシュートが決まらず最悪の試合内容でした。

　やはり日本の場合、体格、技術の差は認めざるをえません。なにが必要かというと、相手に向かっていく姿勢が大事なのです。1点差でも10点差でも負けは負けですが、今の日本には、次につながる負けがないような気がしました。早く1勝するためにがんばりたいと思います。

広政宣孝

　自分は、今大会で初めて世界のトップレベルのプレーを目の前で見た。過去にテレビで見た事があるのだが、実際に見てみるとため息が出るばかりだった。パワー、スピードは日本選手よりはるかに上回っていて、また勝つ事への執念もすさまじかった。そういった貴重な体験を基に、世界のOFについて日本と比較しながら述べようと思う。

　外国人は日本人よりも体験が良く、そのせいかパワーも上回っている。そのため、日本がDFをしている時に、少しのすき間でも割り込まれパワーで行かれる事がしばしばあった。自分達学生同士では、その様な事はあまりない。同様に、外国人同士ではその様な事はあまりない。それは同じぐらいのパワーだからだと思う。また、日本人と試合をする時はロングシュートもどんどん打ってくる。これも体格・パワーの違いだと思う。ロングシュートを決めようと、シューターを押したりするのだが、それがどうしたと言わんばかりにすごいシュートを打ってくる。しかし、外国人同士では、そんなにロングシュートを打つのではなく、パスを回して回してカットインやミドルシュートといったプレーが目立った。それは何故かと僕なりに考えてみた。一つ目にロングシュートの確率よりもカットイン、サイドシュートの確率がいいからである。二つ目にテクニックというよりも力という感じなので、枝をかわして打つことがあまり得意ではないという事だと思った。

　以上の事以外に、ボール回しが速く、またそのつなぎがいい。それと、日本人は背が高すぎると動きがにぶくなる人が多いが、外国人はスピードもすごい。

　しかし、日本よりもテクニックの面では下だと思う。もっと上手にOFをすればいくらでも点が取れると思う。今、日本に一番欠けているのが、勝つ事への執念が足りないという事だ。体の事よりもまず勝つ事の方が優先という感じだった。これさえあればもっと好成績が獲得できたのではないだろうか。

　自分なりに、世界で勝つためには何をしなければいけないのか、何が必要なのかが分かりかけた。これを礎に、今以上の努力をして次の世界学生選手権大会で良い成績が残せる様にがんばろうと思う。

長嶺重信

　日本と世界のDFを比較すると、まず第一に体格の違いに気が付く。外国人選手は、身長はもちろんだがまずパワーがすさまじい。この差は何から生まれるのか私は知らないが、とにかく高い上に幅のあるDFが世界のDFである。

　それと比較して日本人選手は、体格の面でやはり少し外国人選手に劣る。よってこの体格の差によるDFの弱みを補うには、どうするべきかを日本は考える必要があると思う。

　さてそこで世界のDFと日本のDFとのシフトをみると、世界は0対6ディフェンスがほとんどであった。これは高さを生かしたもので、シュートをディフェンスの上から打たせてコースを片方つぶし、キーパーと勝負させるつもりだろう。日本のDFは、1対2対3のシフトをひいている。これは、高さとパワーのシュートをできる

だけ遠くから打たせて、いや打たせないで、サイドシュートにもっていきキーパーと勝負させようというディフェンスである。やはり日本人は体格差をこういう面でうめなければ、外国人とは勝負にならないのか？

そこで、外国人と日本人のＤＦの違いをポジション別に見てみよう。まず、ＤＦの要といえばＧＫである。ＧＫは、外国人選手を見るとやはり手足が長く大きい。という事はコースをつくボールに強く、面がでかい。日本人の場合は、動きが俊敏である。その面からしても日本のＤＦがサイド勝負にもっていくのもわかる。

ＧＫ以外のＤＦを見ると、外国人は１対１を守るのが大きい分強い。その点日本は、しっかり横につなげて２人で１人を守る様にしている。これらのことから、世界のＤＦと日本のＤＦを比較して日本の良い所は、背が低い分、よく動き、足を使う。二人で一人を守る為にとなり同士の連絡や伝達がよくとれている。キーパーとのかけひきもよくとれて、「全員ＤＦ」そう名付けても良いであろう。

日本が金メダルをとる日はもうすぐだ。

荒木　進

選手権が始まるのは12月12日の予選リーグ戦からでした。しかし、予選リーグを戦う前に８、９日とロシアのスキフ体育大学と２試合をこなさければなりませんでした。初戦、戦った感じは負けはしたものの、あまり強くないといった感じでした。だから、第二戦の試合では前半は全日本学生のリードでした。しかし、後半に入ると余裕がでてきたのか、少しおごりもあったのか思うように足が動かず、結局負けてしまいました。後で聞いた話によると、スキフ体育大学の主力メンバー５人がロシア学生チームに選ばれていると聞き、驚然とした。その後、10、11日と練習が組み込まれていたけど、オーストリアが来て全日本学生に試合を申し込み、10、11日の練習試合をするようになった。

私が今年（平成４年）世界選手権Ｂグループに出場した時のオーストリアと変わらない陣容でした。

練習試合初戦、オーストリアと対戦した時は、まったくといっていいほどに叩きのめされました。点数差もダブルスコアになってしまい、その日の夕方緊急ミーティングも設けられ、明日（11日）の練習試合に対する意気込みを言って試合に臨みました。それに試合当日スタッフ陣に相手チームを30点以内、20点以上という目標を与えてもらいチームにやる気がみなぎり、良い雰囲気になっていった。

その結果、相手チームに29点しか与えなかった。しかし、点数は17点しか取れず負けてしまった。

これらの中で感じた事は、身長はもとよりパワーの違いをまざまざと見せつけられた感じでした。また、身体接触プレーにおいてもボールを活かすという最大の、そして上手なプレーが随所にみられた。

これから日本が世界を目指すチームになるには、これらの事を埋め少しでも近づき日本独特のプレーをやっていく事を痛感しました。

森岡健二

テストマッチのオーストリア戦について、感じたことを書いてみます。

とにかく相手は大きいので、ディフェンスは高く、オフェンスは全員で動かなければ、勝てません。前半10～20分位までは足が動いているので、ディフェンスもまだ守れていますが、その後は、オーストリアにいいようにやられています。身長も体重もパワーも違うので始めは圧倒されてしまいました。前半が終って後半は、オーストリッチのオフェンスのパターンやディフェンスのあまい所などがわかってきたので、オフェンスもディフェンスもできるかと思ったのですが、なかなかそううまくは行かず10点以上の点差で負けてしまいました。オーストリアのチームのほとんどの選手がナショナルの選手なので、ゲームに慣れている。それとハンドボールを楽しんでプレーしています。日本のチームは、オーストリアにくらべて固くプレーしているというか楽しんでいないように思いました。なぜかと言うと、元気があまりなかったからだと思います。実力から見てはるかにオーストリアは、強いと思います。

しかし、日本のチームは、本当に短い練習の割には、よくやれた方だと思います。オーストリアは、特にディフェンスがとてもうまいです。ピストンや１対１、チェンジプレーや強引なカットインプレーに対してのあたり等です。日本のプレーはフェアにしているので、もう少し闘争心をむき出しにしていいと思います。

どうすればオーストリアに勝てるか、それにはパワーをつける。つまり、外人に負けない、外人にあたり負けしない体をつくる事だと思います。それと速攻だと思います。遅攻で攻められない分、速攻でとり、後はディフェンスをどれだけするかで勝負が決まると思います。

オーストリアは身長が高いだけでなく、よく動きます。日本のチームは、もっとよく動かなければならないと思います。このゲームの途中にもよくコーチに「足を動かせ」と、何回も言われました。もし今度オーストリアとまたゲームができる機会があれば、オーストリアに、日本は強いと思わせたいです。

全日本総合選手権二連覇

日新製鋼

★岩田部長にインタビュー

広報　全日本総合二連覇おめでとうございます。岩田さんのご苦労が実ってきましたね。

岩田　どうもありがとうございます。それほど苦労という苦労はしていません。私はあれこれと指示をしたり、時々練習をのぞいては小言をいう程度です。私と湯中君は、8年もの付き合いですからツーカーの関係ですね。技術的なことはすべて泉君、チーム管理は湯中君、選手のメンタルヘルスは日野君に任せてあります。私の考えでは、チーム・選手の管理は、それに適したOBに任せることがベターだと思います。日野君はご存じのとおり持ち前の明るい性格で選手達から信頼されています。湯中君はなかなか織細ですが行動が速く判断も的確です。彼らは大変苦労していても、私にはその素振りを見せませんね。私の任務は、チームが常に最高のコンディションで試合に臨めるような条件整備と思っています。

広報　そのようなきめ細かい管理をされるようになったのはどうしてですか。

岩田　決して管理しているとは思いません。チーム強化を基礎から考えました。主力選手を私のいた総務部に配置することからはじめ、色々と考えてみました。部をプロ野球球団組織のように現場とフロントに分けると、監督は勝負する技術(現場)だけに専念できます。管理・渉外(フロント)を湯中君が担務しています。それぞれがプロ意識をもって仕事にもハンドにも取組めるようにしました。各自が100%の力を出しきって頑張っています。一人一人に責任と自信を持たせることが大切なのです。何事にも一生懸命そして楽しくやることですね。

広報　他チームに先駆けて専任トレーナーとの契約など、会社のチームに対する考え方が変わったようですね。

岩田　会社は、ハンドボールに投資をしていますから、当然投資効果を考えます。会社に対し強化のための条件をお願いしたら、私達が最大の効果(優勝)を挙げればいいのです。昨年、今年と二連覇したので日本リーグの制覇を達成した暁には何らかのご褒美をいただくよう会社にお願いするつもりです。

★湯中マネージャーにインタビュー

広報　全日本総合二連覇おめでとうございます。

湯中　今チームには、勢いがありますので心配していませんでした。ベテランと若手がお互いに適度の緊張感で試合に集中し、好結果をだせたと思います。私は、優勝祝賀会や挨拶回り等の準備とか、帰りのキップのほうを心配しました。

広報　この二、三年、チーム力が上昇してきましたが、それ以前のご苦労をお聞かせ下さい。

湯中　岩田部長といつも優勝できるチームの条件を研究しています。仕事・予算・練習・選手の将来・スカウトなど。三年前、源内・林君を入社させるまであちこち出掛け回ったことぐらいですね。二人は即戦力として期待していましたから、今その結果が出ています。うちは、全員攻撃を目指してチームつくりをしています。これからもスカウトは重要な問題です。あとはリーグの制覇と西山選手の日本記録達成(リーグ通算得点にあと44点)が課題でしょうね。現在景気低迷で会社もきついところですが最大限のバックアップをして頂き感謝しています。

わかしゃち国体への
ハンドボール 意気込み

愛知県協会だより

昭和25年以来、43年ぶりに愛知で開催する国体(わかしゃち国体)が、いよいよ1年後となる年を迎えました。都会型国体の難点と言われているように、一般市民の国体に対する意識は今一つ盛り上がりに欠ける状況ですが、県及び会場地市町村実行委員会と各競技団体は本大会の成功と総合優勝を旗印に着々と体制を整え、本年のリハーサル大会から来年の本大会に向けて、懸命な努力をしているところです。

愛知県ハンドボール協会においても円滑な競技運営の基盤となる競技役員の編成、競技補助員の養成、また、選手の強化等に総力を傾注しなければならない重要な年であり、この1年が正念場と考えております。

大会運営については、その前段として本年は、3月の全国高校選抜大会を筆頭に、5月の全日本女子実業団選手権大会、8月の全日本教職員選手権大会(国体リハーサル大会)、そして12月には第1回大会以来となる全日本総合選手権大会の開催等、全国大会が目白押し。これらの大会をすべて成功させることが県協会に課せられた重大な責務と考えていますが、同時にこの機会をとらえ競技役員並びに競技補助員の養成を図っていこうと計画を進めております。そして、これをステップにより強固な体制を確立し、万全の態勢を整え「わかしゃち国体」に臨む所存です。

選手強化対策については、総合優勝が使命、しかし、県協会としては総合優勝をすればよいといった安易な考えではなく、5種別完全制覇を達成する意気込みで努力をしなければよい結果は得られないという考えでいます。

国体で過去10回の総合優勝をはじめ、常に上位入賞を果たし愛知の得点源として実績を残してきただけに、ハンドボールへの期待は大きく、総合優勝は最低の条件であります。それ故に、昭和35年の熊本国体で達成した4種別制覇の完全優勝に思いを馳せ、「夢よもう一度」と大きな目標を掲げた次第です。

当時と比べ、競技人口は飛躍的に増大、技術も格段の進歩を遂げ、全国的にレベルが均等化した今日、完全優勝は至難のことと言えましょう。しかし、その道が険しければ険しい程、やり甲斐のあることではないか、勇気をもって苦難に立ち向かう努力が重要なことであり、ひいては将来の貴重な財産になるという信念で、あえて難関に挑戦しようとするものです。目標の達成目指し、強化部を中心に指導者一丸となって選手強化に当り愛知の底力を見せようと頑張っています。

さて、国体の会期ですが、広島で開催されるアジア大会の関係で秋季大会は例年よりやや遅い、10月29日から11月3日までの6日間に決定しました。また、会場地は県の国体開催方針で分散が決められ、58高校総体を開催した豊田市(成年女子・少年男女)をメインに隣接の知立市(成年男子1部)、三好町(成年男子2部)の2市1町で開催することになりました。全国からお迎えする皆様方に満足いただけるよう、会場地市町と協力しながら環境整備に努力してまいります。

最後に、日本ハンドボール協会をはじめ全国のハンドボール関係者のご指導、ご支援をお願い申し上げますとともに、各都道府県代表の選手の皆様にはフェアでクリーンなゲームを展開し、愛知県民に「これがハンドボールだ」という醍醐味が味わえる素晴らしいゲームを披露していただきたいと熱望し、期待するものであります。

委員会報告　強化委員会

女子ジュニアが世界選手権大会の出場権獲得

強化委員長　井　薫

　平成5年のスタートにあたり、強化委員会からのご挨拶と所感を述べさせていただきます。まず皆さまのご協力のお陰と現場の頑張りで、昨年の9月上海での第1回極東大会で男子ナショナルが優勝、来年の広島でのアジア大会、さらには3年後のオリンピックにむけ好スタートが切れた事、そして女子ジュニアが本年8月に開かれるジュニア世界選手権大会の、出場権を獲得出来た事を成果としてご報告したいと思います。

　女子ナショナル、男子ジュニアも前述のチームと同様の努力は重ねていますが、アジアの強敵に囲まれ、彼我の選手層や強化に関する環境の違い等、いまが最も苦しい時であり、皆さまのご理解とご声援をお願いします。システムや環境整備は強化委員会や協会の命題であると受け止めます。

　ただスタッフや選手にも、確かな前進のための大いなる工夫や、精神面、体力面の努力は厳しく求めていきたいと思いますが、ナショナルプレーヤーとしての一つの理想像を描く時、私達は幸いにもハンドボールの仲間にそれを求める事ができますので、ご紹介したいと思います。

　男子ナショナルチームのゴールキーパー橋本行弘選手(本田技研)。彼の卓越したプレーは今やアジアNo.1のキーパーというより、世界でも上位にランクされるもので、まさに日本の守護神として大活躍ですが、旺盛な研究心、ひたむきな練習の姿勢、不屈の精神力に加えて謙虚で円満な人柄は、まさにプレーヤーの模範であり、本年度の日本スポーツ賞に日本協会より推薦され受賞が決まりましたが、私達の誇りでもあり目指したい目標です。

　さてナショナルの強化は、ジュニアの活発な活動、人材の発掘が原点と考えます。その意味から、年度半ばからの話で、関係方面にご迷惑をおかけしながらも実施が決まりましたJOCのジュニアオリンピックカップも強化にとって朗報であり、また本年からスタートした選抜大会の優勝監督のナショナルスタッフ入りでの、大会の活成化も期待致したい部分です。

　この件では男子優勝の浦和学院の岩本先生、女子優勝の四天王寺の繁田先生が指名を受け、繁田先生はリトアニヤでのB世界選手権に参加、世界の技、流れを視察いただきました。岩本先生にはオランダ遠征にとご案内しましたが、学校行事で日程の調整が難しく、2月のジュニアの韓国遠征への参加を検討いただいています。

　いずれにしましても、高校の先生方に世界を体験、現場のご指導に役立てていただくこのプランは強化委員会が提案、高体連で審議「選抜の優勝監督」と決定をみたもので、定着させ成果を期待するものです。

　さらに将来日本がメダルを獲得するために必要な技術や、戦術そしてプレーヤーの大型化の長期計画の立案、実施は急務であり、男女専門委員長を中心に10年、20年後を見据えた組織づくりも新年度のテーマとしたいと思います。

　強化委員会はナショナルチームの活発な活動に伴う、ハンドボールの普及、技術の向上を促進するために存在、男女ナショナル監督、男女ジュニア監督に、若干名の学術経験者、スポーツ医科学、そして実連、学連、高体連の組織から選出されたメンバーにより構成されますが、ジュニアの強化に注力するために、新たに中体連にも加入を依頼したいと思います。長びく不況は、強化の予算にも少なからず影響しますが、このような時こそ強化の方法もより効率的な、あるいは視点を変えたものに英知を集める姿勢で対応したいと思います。これからもナショナルチームをよろしくご声援ください。

ドイツ研修レポート

ブンデスリーグを見て

田口　隆

私は初めてドイツの正月を迎える事になったのですが、こちらの正月は日本と随分違って、特別に何かする訳でもなく、休みもなく（1月1日だけ休み）、私が通っているクラブも12月30日に試合を行い、31日はトレーニングがなく、1月1日からは既にトレーニングが始まっています。

今回は今シーズン真最中のブンデスリーグについていろいろご報告したいとペンを取りました。

皆さんも御存知の様にブンデスリーグは1部リーグを頂点に、ピラミッド型に構成され、実力に応じ各クラブはそれぞれのリーグで試合を行っています。

例えば私がお世話になっているTSV Bayer Dormagenは、1軍が1部リーグに属し、2軍は5部リーグ、3軍は6部リーグ、4軍が8部リーグにという具合になっています。

範囲としては1部は全国的な範囲で、2部リーグは南部、中央部、北部と三分割され、またその下のリーグになるとそれぞれが幾つかに分かれています。

TSV Bayer Dormagenチームの入場

次に1部リーグでの試合の様子をお知らせしますと、各チーム間の対戦がホームアンドアウェー方式をとり、1シーズン1チームが34試合行われます（1部リーグ＝18チーム）。運営はホームのクラブが行い、各試合とも会場の雰囲気はそれぞれ違って、いろいろな体育館に足を運ぶのも今では私のひとつの楽しみになっています。観客は試合だけでなく、アップの時からも選手の顔写真入りのパンフレットを片手に、大勢早くから詰めかけています（日本の様にその日に何試合もあるのではなく、その試合だけなので、アップから選手達はコートに現れ、それぞれアップを行います）。

その時から既に応援はピーク時を迎えるかの様な盛り上がりを見せ、観客はそれぞれお気に入りの選手の名前を呼んだり、応援歌なのでしょうか、合唱が始まります。

そういう事からか、選手紹介はアップの時に行われ、アップ終了後一旦引きあげ、再度選手たちの入場となります。

TSV Dormagenの場合ですと（ホームの場合）体育館の照明が落され、スポットライトが入口に当てられると、そこから選手が入場してきます。またこの時も耳が痛くなる程の歓声が体育館に響きます。そして選手は一人ずつ持って出てきたファンサービスの為の品を観客席に投げ入れるのです。またここでも子ども、おとな関係なく自分の所に投げてほしいが為に、また選手の名前を呼び続けるのです。そして試合が始まり、ワンプレー、ワンプレーに一喜一憂し、声を枯らし応援しています。

試合が進み、前半を終え、ハーフタイムを迎えると、お楽しみ抽選会が行われ、またまた観客は盛り上がります。そして試合が終われば、終ってすぐに家路につく日本とは違い、体育館にある軽い飲食の出来る所で遅くまで話し込んでいる人達も見かけます。

ハーフタイムの抽選会(上)とファンサービス

日本とは違い、娯楽の少ないドイツでは、試合を観戦する事を楽しみにしている人も多く、またこの様な雰囲気の中でプレーする選手達も、充分観客にアピール（決してスタンドプレーではない）するに値するハッスルプレーを展開します。

日本とドイツではいろいろな背景が違い、問題も多くあると思いますが、将来この雰囲気が日本でも体験出来る事を望み、これからも続くドイツでの研修に励みたいと思っています。

体力づくり面から新生全日本男女を憂いて

西山　逸成

1、ナショナルチームの今後の課題

昨年は1992年バルセロナオリンピック大会への出場権が獲得できず、日本の男子球技種目で唯一オリンピック大会の連続参加(ミュンヘン、ロサンゼルス、モスクワ=不参加、モントリオール、ソウル)が絶たれた屈辱の年と言える。

一方、アジア地域代表権をしてバルセロナオリンピック大会に男子・女子とも参加した韓国は、女子がソウルオリンピックに連続して金メダルを取得し、男子は6位に入賞の驚くべき成果を挙げた。この結果は次のアトランタオリンピック大会への参加を悲願とした新生日本男女ナショナルチームにとっては厚い壁と言わざるを得ない。

併しながら新生男女ナショナルチームともに、アトランタオリンピックへの始動初年度の世界選手権B大会では、男子12位、女子10位の下位に低迷した。共通の敗因は、少くともこの数10年間誰もが指摘！　されども未改善の〝外国選手の高さとパワーとスピード、そして戦うガッツに欠ける〟であろう。

新生全日本男子選手の世界選手権B大会所見（協会機関誌326号=92年12月）から今後の課題を拾ってみると、

①蒲生監督の競技指針「点を取れ・体を動かせ・闘争心」で全選手戦ってはいるが、外国選手の高さ・パワー・スピードには圧倒されるのみ。

②世界の一流選手は技術・精神・体力すべてが優れている。

③技術向上条件として強靱な筋力が必要、全日本選手全員が筋力アップしなければ通用しない等である。

2、1992年度体力測定結果からみた強化方向

(1)男子ナショナルチーム

前ナショナルチームの身長184・9㎝、体重78・0kgに比較し、184・9㎝、80・2kgと小型化といえる。最大無酸素パワー（体重当たり）では、前チーム平均14・6Watt/kgに比し12・7Watt/kgと13%の低下を示しており、外国選手に対して筋肉の太さや筋肉量、体重を増加させ筋力、筋パワーの向上による無酸素パワーの向上の必要性が叫ばれよう。筋力面では身体の総筋量の指標としての背筋力は、前チーム平均195kgに比し188kgと4・6%の低下であるが、握力平均値63・8kgは前チームより優っていた。腕の伸展筋力の指標としてのベンチプレスも目標水準(体重の1・5倍)に比して1・2倍と低い水準であり、また下肢筋力としてのスクワットも目標水準（体重の3・0倍）に比して2・46倍と低い水準を示した等々を総括すると男子チームは体型的には小型化し、敏捷性と有酸素パワーに優れるものの、筋力、筋パワー、無酸素パワーに劣ることが解った。

(2)女子ナショナルチーム

新生のナショナル新人群を前ナショナルチームとの比較でみると、身長・体重は同一水準であるが、体脂肪率では7・1%の高値を示し、背筋力では17・7%の低下、肘屈曲力も減少を示し、下肢筋では伸展と屈曲の拮抗が65%水準以下の選手が多く、足・肘関節障害の防止面からも筋力強化が望まれる。また前チームから継続した選手群6名の体力水準は、筋力、最大酸素摂取量等低下傾向であることから、今後の体力的課題として敏捷性、筋力、無酸素パワーそして体脂肪率の改善努力が急務といえよう。

今後3年後のアトランタ大会に向けて、日本がアジア地区で世界のトップ水準の韓国を打破するためには、現代のスピードハンドボールが戦える資質、すなわち前半・後半の各30分間に40回前後の激しい攻防戦に堪え得る体力―一回の攻防が約30秒前後の無気的な間欠運動という単なる有酸素的な定常運動ではなく、強度な運動負荷を強要される―の必要性を重視しなければならない。

体力づくりにあたっては、スタッフと選手のみでなく、選手の各所属チームの指導者が三味一体となり、選手の個人別運動処方により、身体各部位別のトレーニング法および筋力・パワーの養成法との両者がともに望ましい栄養管理のもとに正しく、継続的にすすめられてこそ日本チームが世界に届くといえる。

世界選手権B大会報告

監督・繁田順子

元来、ヨーロッパのスポーツであるハンドボール競技において、アジアチームがどれだけ世界にくい込むことができるか。これは、先輩諸姉の代より受けついだ長年の課題でした。しかし、その壁を見事に打ち破ったのがソウル五輪での韓国ナショナルであったし、しかも昨夏のバルセロナでV2までやってのけ、その強さを不動にしたのも記憶に新しいところでしょう。そしてこの躍進は私達にも大きな勇気を与えてくれました。その後、多くの実業団や大学チームに韓国選手が助っ人として加入し、レベルも向上、また、最近では中・高校生にまでも日韓交流が盛んに行われる等、今の日本ハンドボール界が強い影響を受けているのは改めて言うまでもないでしょう。

さて、今回のナショナルチームですが、松田史佳主将を中心に16名で編成され、その多くが全日本初参加(ちなみに一昨年の例の百何日にも及ぶ長期合宿経験者は4人のみ)。チームスタートが昨年の4月。2、3回の合宿の後、9月の上海国際大会が初の対外試合。その後わずか2ヶ月で今回の選征、大会を迎えたのです。そういう状態での第一戦は、今大会優勝チームとなったハンガリーナショナルとの練習試合でした。メンバーの大半がヨーロッパチームと初対戦だったので、すっかり度肝を抜かれ見事に完敗。高さ・パワーと大きな体から繰り出すシュートを守り切れず、攻めては、高い枝にはばまれロングシュートは全てシャットアウト。守りで振り回わされ、スタートの遅れた速攻もちぐはぐでミスの連続。お家芸のスカイプレーもそう何度も通用するものでもないし。という訳で成す術を失ったのです。

次の訪問地オーストリアでも同じことで、結局不安を取り除く間もなく本大会へとリトアニアに向かったのです。

本大会での詳細は、他からの報告通りですが、今回何より悔しく思われたのは、国際試合経験者があまりにも少なく、経験不足により、思うように能力を使えなかったところです。我々日本人は西欧人にどうしても勝てぬ点が多々あるといえども、今のままでは能力以前の問題です。大会プログラムで見る限り、国際試合経験数、日本選手最高の35試合は、諸外国の80や100とは比べものにならないのです。日本という地理的条件の悪さが大きなマイナス点であるが、もっと多くの国際試合を経験させてやってほしいと痛感しました。

次に問題として考えねばならないのは、エースポジションの選手層の薄さです。文頭に日韓ハンドにふれましたが、全てのチームにと言っていいぐらい、外国人選手はエースポジションについています。それぞれのチーム事情もありますが、いざナショナルチームを作るとなると、どうしてもそのポジションは手薄となり、セットオフェンスの得点が苦しくなります。外国のどのチームにも経験豊富なエースと呼ばれる選手がいるものです。

結果的には残念な成績に終わりましたが、将来に卑下することはないと思います。何よりも特筆すべき世界の強豪チェコから大金星をあげたのですから。

以上のことを振り返ってみますと、今後は長期展望で高校生より国際試合への意欲的参加が望まれます。そのためには、日本での国際試合を少しでも多くし、世界的なプレーを真近で見る場を与えてやりたい。また日本選手も自分を見られるという環境に置くことによって、より大きく成長するでしょう。

思うに、今回のナショナルメンバーを知っている人が果たして何人いるでしょうか。いつまでも体格の違いや孤島だから等言ってはいられません。周りに、より国際的に通用する選手を育てていかねば、そしてみんなの「全日本チーム」であってほしいと思わずにいられません。

そういった意味も含めての今回のコーチ選出であろうと感じましたが、現在高校生を教える立場としてしみじみ今後の指命を感じたわけです。

上田治美

リトアニアに入る前の合宿では、まずヨーロッパの人の大きさ、馬力にある程度の予測はしていたもののそれ以上の気迫や雰囲気にのまれて出だしからつまづいてしまった感じでした。何をやっても通用しないのでは?といった不安や監督、コーチの指示さえ落ち込みの材料になってしまい、まさにこれが「どん底」だなぁと思いました。どん底まできたら後は上昇するのみ。とばかりにみんなの何かがふっ切れたのか、強豪オーストリアのナショナルチームとの練習試合では、小さいながらも体を張ったディフェンスや相手の壁をぶち抜こう、押し倒してでもシュートを決めてみせるといった闘志が一瞬一秒足りとも目を放すことができない試合をすることができました。結果では1点差で負けてはいるものの、本大会直前合宿での手応えを感じられたし、何かできるかも知れないという可能性をもってリトアニアに臨めたような気がします。

さてその大会会場であるリトアニア。飛行機から荷物を降ろすといえば、一台のトラックが雪の中を何往復も…。途中で山積みの荷物を水たまりに落としても、平然と泥だらけの荷物をまた積み直してそのまま。ホテルは最近できた新しいホテルで、シャワーの水等がサビ水なのは別にして良いホテルでした。食事も私達の口に合う物が豊富にあり、生活面に関しての心配はありませんでした。

28日から早速試合開始で、まず日本はイタリアと対戦し、落ち着いたゲーム展開で初戦に白星を飾りました。次に対リトアニアでは、地元の応援。応援というより笛を邪魔する騒音に圧倒されてしまいました。もち論、それが敗因ではないのですが…。対フランス戦では最終的に1点差まで詰めたのですが、前半で相手に思わぬ逆速攻で連続得点をされたのが悪い所でした。黒星の続くだけにもう1勝が欲しい日本ですが、この後ブル

ガリアにも負け、とうとう最終戦相手はA組1位、2位を争うチェコスロバキア（チェコ）。「とにかくおもいきり行こう」と肩の力を抜いて、しかし最後の意地を持って試合に向かった対チェコ戦。シーソーゲームが続く中、会場の観客の流れが日本に傾いたその後、日本のナイスバックからのシュートで勝利が微笑んだ。私はビデオ越しの感動だったけれど、本当にうれしかったです。日本のハンドボールが世界の人の胸を少しついたような気がしました。

今回の大会を終えて、この大会ではまだまだ力不足の為出番はなかったのですが、私なりにこれからの課題を見付けられたような気がしました。

帰国後すぐに全日本総合があり、今迄に実感した事のない「時差ボケ」に悩まされ、おまけに怪我までしてしまい、改めて「自己管理」の難しさについて考えさせられました。

最後に、技術向上と自己管理が同じ位大切な今後の課題であると痛感しました。

西口貴子

11月12日、遠征の直前合宿の為、大和銀行桃山台体育館に集合。2時間程の練習を行い軽く汗を流しました。

遠征を控えたこの合宿で、スタッフからは一つの目的意識を持つことと、相手が大きい事を意識して練習に取り組むよう再三注意がありました。

身長差がある事は、頭の中では理解できていても、実際練習をするとなかなか意識してできていなかったように思います。

12月18日、いよいよ出発です。合宿では、実際外人を相手にやってきたのではない為、不安のいりまじったまま、まずは遠征先のハンガリーへ向け、たくさんの見送りを受けながら、大阪国際空港を飛び立ちました。

途中、香港、フランクフルトを経由し、無事ハンガリーへ到着。その日、2日体を動かしていなかった為、さっそく着がえて、外で汗を流しました。4時頃だというのに、日が暮れるのが早く、外は真っ暗で、すごく日本ではない事を感じました。

12月20日、ハンガリーチームと遠征第1回目のゲームを行いました。スピード・高さ・パワー・技、全て揃ったようなチームだったように思いました。大会を目前にしたこの遠征で、まずは、高さに慣れるよう心掛けてはいたのですが、練習してきた低く守る事すらできず、21－38という大差で負けてしまう結果となりました。

次の日、会場を移りもう一度、ハンガリーチームとゲームが行われました。客席は満員で、日本では考えられない熱狂的なファンの歓声の中、ゲームは行われ、どうにかくいさがろうとする日本を、ぐいぐいつき離し、この日もハンガリーの大差での勝利となりました。

この2日間、負けはしたものの、外人に対してどう攻め、どう守るべきかたくさん学ぶ事ができたと思いました。また、自分達の反省材料も見つかり、次のオーストリアへ向け気持ちの切り替えをし、ハンガリーを後にしました。

オーストリアでも、ナショナルチームと2ゲーム、ジュニアと1ゲーム行われ、外人に対してかなり慣れる事ができ、とても良い合宿となりました。

そして、いよいよ大会の地リトアニアへ出発。情報がわからないだけにとても不安の多い中リトアニアへ。ホテルは思っていたよりもきれいで、食事もかなり食べれました。寒さもさほどではなく快適に過ごせました。

そして大会は、予選2勝3敗で5位に。順位決定戦では、夏に負けている北朝鮮にまたしても負けてしまい、10位という結果で終わる事になりました。どのゲームも後半はいいゲームができており、前半の立ち上がりで内容も変わっているような気がしてなりませんでした。チェコ戦のように、最初からくらいついていく粘りが、最初から全力でぶつかっていく気迫が、これからの課題だと思います。

日本で経験できないこの大会に参加できた事、いろんな国の人と知り会えた事、本当にうれしく思います。そして、この良い経験を生かし、がんばっていきたいと思います。最後に、この遠征で無事にケガがなく日本に帰れた事、本当に良かったと思います。

小俣訓子

私にとって初めてのヨーロッパ遠征。自分がナショナル選手として世界B大会に出場し、通用するプレーができるのだろうか？　という不安と、国際レベルのプレーを実際に体験できるという期待を胸に向かいました。

直前合宿で、ハンガリーとオーストリアのナショナルチームと練習ゲームをさせてもらいました。日の丸の旗に向かい国歌を聞いていると、改めて〝日本の代表なんだ〟と思い、体が奮い立っていくのを感じました。

この合宿まで自分より遙かに大きい相手に対する攻防を頭では理解していたつもりでしたが、実際にぶつかってみると自分の小ささを痛感させられました。私がマークするサイドで１７０位あり、中には日本のフローター陣より大きい人もいて少し驚きました。そして、日本で通用していたプレーが、国際レベルでは相手ボールになってしまう事が多く、戸惑いました。例えば、フローターからずらしてもらってのサイドDF側からのシュートですが、キャッチしてジャンプしようとした時にはDFが目の前にいてチャージをとられたり、ドリブル速攻で走っていく時に、横から当たられシュートモーションでなかった場合などは、逆速攻につなげられてしまいました。

この合宿で少しずつ、ぶつかった時の重みや、スピードに慣れ、サイドシュートに行く時にチャージにならない様、切り返して打つとか、追ってくるDFのもっと外側から打つ、普通にずらしてもらうだけでなくスカイにしてもらうなどのプレーを体で覚えられました。小さければ小さいなりに、速さで勝てればいいのです。大きなDFだったら、腕の下をくぐる様なフェイントをすればうまくいったし、守る時は力で押し込まれない様、早目に足元をすくい上げる様に当たっていけば止める事もできました。

ただ、大きな相手に、頭から突っ込んでいくには、闘争心を表に出し、気迫のこもったプレーをしていかなければなりません。大会中、スタッフから何度も「強気で行け！気迫の勝負だ！」と言われ、いま振り返ってみると、1点差で勝ちを逃してしまったフランス戦、北朝鮮戦が大変悔やまれます。

やればできるという自信を持っ

て、順位決定戦で北朝鮮と当たったわけですが、私達の想像以上に相手は執念を持ち向かってきました。極東大会で32－24と8点差もつけられ負けていた相手に対し、私達は気後れする事なく攻めていき、前半14－12で折り返したのですが、後半は積極的なピストンDFに攻めきれずパスカットされ逆転されてしまう。ヨーロッパの様な動かない壁を作られた時の攻撃と、北朝鮮の様なプレスDFに対する攻撃の対処が遅れ、ゲームの流れを日本に向ける事はできませんでした。試合前のミーティングで精神面について話し合ったのに、試合で良い結果を出す事ができませんでした。

次の大会はアジア選手権です。今回の失敗をもう二度と繰り返してはなりません。

精神面での強化をこれからの最重要課題として、今回貴重な体験をさせて頂いた事を活かせる様に、努力していきたいと思います。

西村聖子

今大会は私が全日本選手に選ばれて、初めての世界大会でした。私達のような小さい日本人に何が出来るかを試し、国内での合宿で練習してきたことを規範にし、どのような方法や手段で本大会に臨むべきかを、細かい部分までの調整は出来なかったように思いますが、個々の技術の特長を活かすようスタッフからの指示を受け、選手一人一人がチームの中での自分の役割は何であるかを十分に確認したつもりでした。

練習マッチでの成果として、とにかく小さい人間が大きい人間に真向から勝負をすれば負ける可能性は高く、何らかの策を打たなければなりませんでしたから、その一つとしてディフェンスで粘って速攻で点を遮二無二取りにいく。ディフェンスをしていて前につめたにもかかわらず、ロングシュートを打たれてしまうことはある程度仕方がないとしても、その他の失点、例えばポストシュート。このポジションでの失点を防ぎ、そこから全員が走って速攻で点を取る。これが日本のチームが、ゲーム展開の上でリズムをつかむことが出来る最良の方法だったように思います。

約1週間のヨーロッパでの合宿を終え、世界選手権B大会が開催されるリトアニアへと向かいました。

今大会、日本は予選リーグAグループに入り、地元リトアニアをはじめとして、ブルガリア、チェコスロバキア、イタリア、フランスといったヨーロッパの高い壁のチームと戦うことになりました。5戦して2勝3敗と負け越したものの、今大会2位のチェコスロバキアから予選リーグで勝利をもぎとったことは、未熟な私にとって〝やれば出来るんだ〟という大きな自信になりました。その試合で自分がコートに立ち、プレー出来たことに感謝し、貴重な経験をさせてもらってとても満足をしています。

日本は9・10位決定戦で北朝鮮と対戦し、1点に涙をのみ、10位という結果に終わってしまいました。今大会、善戦はするものの、それを勝利に結びつけることが出来なかったことに悔いが残ります。やはり、私達は国を代表してチャンピオンスポーツをしているのだから、もっと勝負にこだわらなければならないはずです。試合会場で子供達にサインを求められることがしばしばありました。まるで、自分が有名人にでもなったかのような気分になりました。しかし、ある意味では、「日本の代表選手なのだ」という自覚と、緊張感を持ちました。

今後は、今大会の貴重な経験を活かして、日の丸を付けることのふさわしいプレーヤーになれるよう、日々の練習に励み、精進しようと思います。

松下由紀子

最終戦チェコでは、全員がひらきなおったのがよかったのか、前半から相手についていく事ができて、DFでもよく守れ自分たちのペースがとる事ができ、相手が必死になってきた頃にはもうおそく、自分たちがリードしたままフエが鳴りました。

その時はもう本当にうれしくて、チェコに勝ったのも初めてという事で、みんな涙を流して大喜びでした。やはり勝つというのはとても良い事だなぁと思いました。

結果は、2勝3敗で5位となりました。順位決定では同じアジアの北朝鮮。前回の極東大会で敗れているだけあって、どうしても勝たなくてはという気持ちがあったのですが…。

試合では、日本の村山さんのナイスキーパーが目立ち、危ない場面を何回も助けてくれました。けれど、最後にミスが目立ち、20－21の1点差で負けてしまいました。総合では10位となってしまいました。

この大会で学んだ事はたくさんありました。国際試合になるとやはり日本とは全くちがい、日本と同じ感覚でやっていてはだめです。日本での試合は4～5点差開いていても、何とかなるものですが、国際試合ではそれを逆転する事はとても難しいものです。前半に10点差もあけられると、やはりどうしてももうだめかなっとあきらめてしまいたくなるものでした。

日本とちがうのは、やはり何といっても体の大きさ、身長、パワーでした。DFなどでこれくらいと思い守っても、力と体重で押し込まれてしまうので、一人を二人で守るくらいでないとムリでした。

自分たちのような小さな体の者が、大きな者に勝てないという事は全くないと思います。小さいなりにどうしなければいけないかを考えてみれば、必ず勝てると思いました。

この大会では、自分はあまり試合に出る事が少なく、試合を見ているといった事が多かったのですが、見て学んだ事、感動した事たくさんありました。これを次の機会に生かせるようにしたいと思います。

谷本　泉

リトアニアへ入る前に、ハンガリーとオーストリアのナショナルと練習試合をしてきました。ヨーロッパの人の大きな壁とスピード、パワーを体で感じ取りました。また、ヨーロッパの審判の判定が日本と違っていました。大会中も、しっかりシュートまでもっていかなかったりすると認めてもらえず、フリースローに戻されていました。フリースローの3メートル離れること、フリースローインに対しても厳しかったです。警告・退場も細かく取っていました。

ヨーロッパの人たちは、自分達に対して一線のディフェンスライ

ンで守ってくることが多かったです。自分は、ポストとしては小さい方なので、見えない所から走ったりして、カットインプレーなどの動きで勝負していこうと思っていましたが、自分の動きではディフェンスをゆさぶることも出来ず、大きなディフェンスの手の中でつかまってしまい、生きたプレーが出来ませんでした。逆に、ヨーロッパのポストマンは、動きこそ少ないけれど、しっかりしたポストの位置をキープして上のフローター3人で、ディフェンスをゆさぶり、簡単なポストパスでシュートへ持ち込んでいました。

自分たちがこのポストを守るには、ボールをポストへ入れられてしまってはもう遅く、押し込まれてしまうでしょう。それなら、わざとポストをあけて、パスするのを狙ってカットするなど、守備の面でも考えていかなければならないと思います。

今大会準優勝のチェコから、勝ちを得ることが出来ました。この勝利はこれからまたヨーロッパの人と戦っていくための大きな励みになりました。

いかに全員が個々の持っている力を試合に出して毎回戦っていけるか、それを安定させることが出来れば、大きな相手でも必ず勝ちをものにすることが出来るはずです。

試合は戦ってみなければわからないものだから、勝つチャンスをつかむか、逃すかは、いつも自分の手の中にあると、つくづくこの試合で感じました。

表彰台にのる各チームの選手たちを見て、とてもうらやましく思いました。日本もあの台に立てるよう、また国歌をきけるよう、これからのチーム作りをしていきたいと思います。

西 朋子

本大会前のハンガリー、オーストリア遠征も含め、一番強く感じたことは、身体・パワー・シュート力のすごさと精神力・集中力の違いでした。

予選リーグ2勝3敗。結果得失点差で9・10位決定戦に出ることになる。対戦相手は北朝鮮だった。北朝鮮といえば、9月に中国で行われた極東大会で一度負けている相手である。

ゲーム内容はやはり1点を争うもので緊迫した雰囲気だった。「絶対に勝たなければ…」という気持ちが空回りしてしまい、コンビがいまひとつ合わず、ミスも多く目立った。前半は相手も同じようにミスが多く助かったこともあり、2点リードで折り返した。後半は前半に比べミスは少なかったものの、点数が取れない時の連続失点などで、北朝鮮ペースになることが何度も見られた。最終的にはミスからの逆速攻で1点取られ、負けてしまった。

今回、コート外からゲームを見ることが多く、プレーすることはほとんどありませんでしたが、いつもと違う角度でゲームを観ることでチームの良い点、悪い点、足りなかったことなどや、勝ちゲーム、負けゲームの大きな差は何か、今何が必要なのかなど勉強になった。今後こういった強い人間を相手に戦っていくには、自分自身まだまだ未熟だし、経験も足りないので、チームに帰ってやらなければいけない課題が増えた。

松田史佳

今回のリトアニアで開催された世界選手権大会は、新メンバーになって二度目の公式国際試合だった。私達はまず、上位3位までにくい込み、来年行われる世界選手権Aグループの切符を手にすることが目標であった。

前回の上海極東大会では、日の丸をつけ、公式試合に出場することが初めての人が半分以上で、まさしく「デビュー戦」という感じで終わった。

予選リーグ5チームが戦い、上位2チームがファイナルへ出場した。

私達はイタリアには快勝したものの、フランスには前半5点差つけられ、後半反撃したが1点差で負けてしまった。勝たなければならない試合を、ここで一つおとしてしまった。

リトアニア、ブルガリア戦は、徹底したディフェンスで前半で大差をつけられ、全く手が届かなかった。しかし、ブルガリアに勝ったチェコには、結果からみてまず無理と思えたが、実際やってみると前半9－11とくらいつき、後半もすばらしい勢いで同点までいき、逆転した。勝利に結びついたのは、個人の実力もあっただろうが、それ以上に一人一人がひらきなおって試合に臨んだことが一番だと思う。しかし「ひらきなおる」ということは、ある意味ではとても大切なことではあるが、「負けても仕方がない」という事を前提にした最低ラインでもあると思う。

チェコに勝つことよりも、フランスに確実に勝つことがもっともっと大切なことだと思う。ひらきなおりで毎試合していたのでは、いつまでたっても安定せず、本当に強いチームにはならない。勝てるチームに負けてしまうのは、一番悔しいし情けない。今の全日本女子は、本当に見当もつかず、どれくらいの実力があるのかゲームをやってみないと全くわからないチームだと思う。まず無理と思うチームに勝ってみたり、勝って当然のチームに負けたり……。

安定した力をつけるには、もっとたくさんの合宿を組み、数多くの国際ゲームをし、試合に対して慣れることが重要だと思う。

全日本女子は、本当に今からのチームだと思う。今回の成績は確かによくなかった。しかし、チェコ戦の様なゲームができる。それだけではあるが、女子にもまだまだ希望がある。現場の選手とスタッフが一丸となって、心も体もトレーニングをつみ重ねれば、近い将来、必ず強くなる。強くなれる。そしてアジアNo.1に……。

貴田直子

今回の大会はアジア以外の初めての対外人で、どういうプレーをするのか、どのくらい自分達と体格が違うのか、体験者が少なく不安をかかえながらハンガリー入りしました。

到着した次の日から練習ゲームを行ったのですが、まるで公式試合の様な形式で、観客の多さと盛り上がりは、日本ではなかなかない事なので、とても驚きました。

試合の内容は、体格の違いに戸惑ってしまい、攻防両方共、何も出来ずに終わってしまった感じでした。

ハンガリーでは2試合、オーストリアでは3試合したのですが、考えてみると、どういう試合でもDFで粘っている時は攻撃も勢いで押していける事が多く、大会に向けてもどれだけDFで頑張れるかが課題とされ、リトアニアへ向

かいました。
　11月28日、大会初日、対イタリア。初戦という事と、午後9時30分からの試合と、経験した事がない遅い時間からという事もあって、結構緊張していました。
　試合が始まってみると、イタリアは攻撃が単調で怖さがなく、DFも前につめてこないのでシュートが狙いやすく、日本も足の動きは重かったものの、ミスが少なく、勝利を得る事が出来ました。
　次からのリトアニア、フランス、ブルガリア戦は、リトアニア戦で自分達のたてた戦術をしても通用しない、DFでも大きくて守りきれない、と何をしてもうまくいかず、大きく点差がついてしまって、次の日もそれを引きずってしまい、勝てる様なチームにも負けたりと、雰囲気も悪くなる一方でした。この三戦の敗因は、戦術とか技術とかよりも、まず相手を圧倒するぐらいの気迫の足りなさだったと思います。
　予選リーグ最終のチェコスロバキア戦、最後だし開き直って、とにかく悔いのない様に自分の持っているものを全部出しきろうと試合に臨みました。いつもだったら前半が始まってから10分あたりが悪く、連続失点ではなされる事が多かったのに比べて、この時はチエコのパワーに押されながらもDFで粘り、リードされてはいたもののの小差におさえました。後半もDFで粘り続け、とにかく速攻で押して、中盤あたりで逆転する事が出来ました。全員が最後の最後まで逃げずに攻撃的だったことが勝ちにつながったのだと思います。この試合に勝てたのは、ベンチも観客席で見ていた人も、本当に一つになってチェコと戦ったからだと思います。でも、やはりチェコに勝てたのに、他のゲームもこれだけやれば…という悔しさも残りました。
　最終的に結果は良くはありませんでしたが、この大会で「全日本」というチームが前よりも自分のチームなんだという実感を強く感じました。

飯塚景子

　今回の世界選手権大会Bグループは、私としてもそうですが、チームとしても初めてのヨーロッパ、世界大会という事で、いろいろな面で不安もありましたし、期待もしました。
　大会前にはハンガリー、オーストリアで合宿をし、ナショナルチームとゲームをしました。初めてこのチームでヨーロッパのチームと試合をしたのですが、日本での合宿の時から毎日のように対外人という事を言われ、考え、想定しながら練習して来たつもりでしたが、一度も対戦した事のないヨーロッパのプレーですから、試合をしてみて相手のパワー・高さに慣れるまでには少し時間がかかりました。特にハンガリーでは、体で覚えるのが精一杯でした。でもオーストリアに入り二試合目には、ディフェンスから速攻のパターンで随所に良いプレーが出るようになって来ました。
　いよいよリトアニア入り。日本は、イタリア、リトアニア、フランス、ブルガリア、チェコスロバキアと同じグループでした。
　一試合目はイタリアとゲームをし、初めから日本のペースで行けたと思います。2試合目、地元リトアニア戦では、体育館全部がリトアニアの応援。それも日本とは違い、ゲームの笛が聞こえないくらいでした。ゲームの方は、リトアニアの高い壁にロングシュートが決まらず、ディフェンスをかき回されてしまいました。一番良かった試合は、やはりチェコスロバキア戦だと思います。
　この試合の前に、リトアニア、フランス、ブルガリアと3連敗していました。みんなが全然前に出て来ないディフェンスに対して、形(フォーメーション)にばかりこだわり、自分のプレーが出ていなかったのです。この試合は開きなおって行きました。この時点でチエコスロバキアは2位の3勝1敗、日本は5位の1勝3敗。負けてもともと、自分達のプレーをしよう。これが良い方に出て勝つ事が出来ました。でも順位決定戦で、極東大会で負けている北朝鮮にまた負けてしまいました。この試合では、今まで言われつづけていた気力という事と、一人一人が自分の良さを出せなかったと思います。特に北朝鮮は、お国柄かもしれませんが、一人一人が強引に来ます。それを日本が受け身になってしまったと思います。
　結果は10位になってしまいましたが、今回の大会ではいろいろな事を学んだと思います。「勝つ事の難かしさ」「勝つ事のうれしさ」「負ける事のくやしさ」――この3つを忘れず、日本の試合でもナショナル選手の自覚、責任をもって活動して行きたいと思います。

比嘉晴美

　リトアニアは、まだ独立して1年しかたっていない国で、リトアニアについての情報がほとんどと言ってよいほど入ってきておらず、かなり寒い所だと聞いていたので、すごく不安でしたが、ホテルは暖房が完備され、食事もおいしいとまではいきませんが、思ったより量も多く安心しました。
　一戦目のイタリアには31－15で快勝。2戦目は地元のリトアニア。まだ独立して1年とはいえ、ヒポバンクに所属していたメンバーを帰国させていて、身長・体重共に今大会ナンバー1と思わせるほどで、大きく高い壁のディフェンスに手も足もでないまま圧倒され22－40と大敗しました。
　3戦目は対フランス。過去ジャパンカップで少しの差で破れているので、どうしても勝ちたい相手。前半は緊張とプレッシャーでみんなの足が止まり、5点差をつけられて折り返すことになり、後半ようやく足が動き出し、自分達のプレーの速攻やコンビが決まり出して1点差までつめたが、同点までいかずタイムアップ。勝てる相手だったのにくやしかった。
　4戦目のブルガリア戦。気落ちしたのか皆元気が出ず、手も足も出ないまま前半で勝負を決められてしまった。しかし、5戦目、スタッフの檄で「皆開き直って試合をしていこう」と声をかけ合い試合をしたのがきいたのか、チェコのポスト、ロングをアタックディフェンスで守り、それからの速攻と、自分達のハンドボールを展開でき、強豪チームからの白星を奪うことができました。
　この時点で2勝3敗となり、フランスと並んだのですが、25%ルールが適用され結局予選5位。
　順位決定9－10位決定戦が行われ、相手は9月の極東大会で負けている北朝鮮だったので、どうしても勝ちたい相手。前半リードしていたが、後半の6連続失点で追いつかれ、逆転負けをしてしまいました。

今大会でチェコには勝つことができましたが、勝てる試合を落としてきたので、まだまだ力不足。やはり日本は身長がないので、全員攻撃で得点することを心がけながら、これからの練習に励んでいきたいと思っています。

石村智江

世界選手権では「日本のプレーが常識では世界に全く通用しない」という事を本当に痛いほど感じました。日本で通用するプレーが簡単に相手にとめられ、こんなプレーが世界で通用するはずがと思っていると、意外にも通用する。それを対戦相手が変わるたびに分析し、短時間でクリアして試合に臨む。それが世界だ。

世界の壁はまだまだ厚い。私は怪我のためコートの上でプレー出来なかった分、他のみんなより精神面で勉強したと思います。技術面は、やはり相手と接し体で学んで、はじめて自分のものになると思います。それでも、目でみたし、プレー出来なくても私は遠征に参加できてよかったです。

最終結果は、順位決定戦で北朝鮮に負け10位でした。「日本女子は駄目だった」と言われればそれまでですが、この予選でチェコに勝った事、それは大収穫だったと思います。そのチェコは、今大会2位。それだけに、悔しさの残る予選リーグでした。でも、チェコに勝った事、あの試合を体験できて良かったです。本当にチームが一つになって、全員で勝った、そんな気がしました。みんなでつかんだ勝利に、心から嬉しくて自然と涙がでてきました。あの感動があるから、苦しい練習にも耐えられるし、壁にぶちあたっても、そこから逃げることなく前向きに考えていけるのだと思いました。

今大会優勝したハンガリーチームと、大会直前にトライアルマッチが出来た事は、大会前に大きな自信につながったと思いました。私達みたいな小さな人間が大きな人間に勝つには、力対力では絶対勝てない。それを感じたし、トライアルマッチで自分のプレーが通用しない。みじめに感じた自分を元気づけるのも自分、辛さに耐える事によって自分がひとまわり大きくなった気がした。そうして本大会をむかえる事が出来て、日本にとってとても良かったと思いました。

国際大会初参加の私にとって、プレーはもちろん、見るもの全てが新鮮で感動のしどおしでした。大会のレセプション。大観衆を前に日の丸をつけて「JAPAN」と呼ばれた時は嬉しくて、自分の夢でもあったし、それに近づく事ができて私一人かみしめるものが他のみんなより大きかったのではないかと思いました。

ナショナルは、やはり一番上のプレーヤーが集まった集団だから、あまえなんて通用しない。怪我しても努力次第でここまでやれるんだ。自分は、怪我してる人達のためにも頑張り続けようと思った。怪我してるんだから、みんなと同じようにしてても進歩はない。どこかで積み重ねが必要だ。試合に出場するチャンスは少なかったが、いろいろな事を学んでるし、そういうふうに考える事が出来るようになった。頑張り続ける事、それが目標ならやる気も違ってくる。

川島ゆう子

新生全日本女子が昨年の4月よりスタートして、このリトアニアで行われる世界選手権大会Bを目標に国内・海外で合宿を行ってきました。ほとんどの選手が若返り、去年のメンバーは5人だけ。試合はおろか、コンビを組むのも初めての顔で、全くゼロからのスタートとなりました。

11月18日、日本での合宿を終え、世界B大会の前に、ハンガリー、オーストリアで合宿を行いました。

最初の地ハンガリーでは、同じ世界Bに出場するナショナルチームと、2試合練習ゲームを行いました。結果は2つ共10点以上の大差で負けました。

練習ゲームとは言え、相手はものすごい気迫で、1点1点取るのに全力でした。日本はこれまで国内で行ってきたことをすべて出すどころか、今までやってきたコンビなど、ほとんどのプレーが高い外人相手に何も通用しない状態でした。

次のオーストリアでもナショナルチームと戦い、20－36で完敗。思った以上に高い壁、パワー、重いポスト。どれをとっても負けていました。これまでに外人相手に通用したプレーと言えば、コンビではスカイプレー。後は個人技のシュートだけ。ここまできて逃げたプレーなどしていては何も得ない。どれだけ大きい相手に立ち向かっていく勇気があるかとスタッフ側からの声。オーストリアでの2戦目。依存心が強かったこれまでの3戦とは違い、一人一人が強気なプレーで、思いきりがよく21－26で負けはしましたが、このゲームで何かつかんだ気がしました。

大会を前に5試合を終え、ある程度外人相手のゲームにも慣れ、大きくて高い壁に対し自分達のプレーで何が通用して、何がダメなのかわかってきました。

世界選手権Bでの結果は10位に終わり、課題ばかりが残った全日本ですが、コートの上の者、ベンチの者、観客席で仲間を見守る者、それぞれの胸の中の思いは同じだと思う。このくやしさを忘れずに、必ずつぎへ生かしていきたいと思います。

委員会報告　審判委員会

審判委員会合同会議報告

日　時　平成5年1月23日（土）～24日（日）

場　所　東京都多摩市「サンピア多摩」

◆**出席者**

〈審査委員〉藤田・岡本・狩野・佐分・加藤・斉藤

〈ブロック部長〉南波・小友・上久保・徳前・吉田・藤本・柳井・松原・日野

〈連盟部長〉西村・北岡・山下・岡本・溝口

〈IHF伝達員〉光島

〈ルール研究委員〉後藤・清水・浜田・小笠原・江成・花野・宮川・兼田

〈委員長〉大塚

◆**報告事項**

1　審査委員報告

(1) A級・B級申請者書類審査

A級　34名合格

B級　57名合格（6名書類不備不合格）

(2) レフェリーの反省と指導

レフェリー活動の反省・その多問題点が指摘され次年度に生かされるようにする(別紙)。

2　各連盟・ブロックの活動報告

各連盟・各ブロックからの要望事項・問題点の主なもの。

(1) プレーヤーの短パンの下にはくパワーパンツの色はバラバラでよいか。

●ルールの中に同一チームは同じ服装でなければならない、とあるので、統一させる。

(2) ポイントシューズの使用について

●全国大会等でコートが荒れると予想されたときには、事前に使用禁止にしている。しかし体育館では床が傷むわけではないので特に問題はない。

(3) セービングの見解は…

●セービングとはルールでは床に止まっているボールや転がっているボールに身を投げ掛けた場合である。したがってサイドライン付近でボールが空間に浮いていれば差し支えない。但し、他のプレーヤーがいて危険と認めれば、それはセービングではなく、危険なプレーとして反則をとる。

(4) ノータイム直前のPTやフリースローはプレーヤーに知らせたほうがよいか

●知らせる必要がない。

(5) レフェリースローの時、一方のチームが来なかったらどうするか

●ルールでは両チームから1名ずつ出て行うことになっているので、来ないことは重大なスポーツマンシップに反する行為となる。

(6) 入退場の正・不正の判断がむずかしい

●交替地域を示すラインをまたぐ事がないように出る時も、入る時も交替地域の4・5mの範囲内からにする。

(7) まだユニフォームの色と背番号の色が見にくいものがあるが…

●再び都道府県協会に見にくくならないよう指導する。

3　審判委員会の活動報告

審判委員会の平成4年度行事(含予定)の活動が報告された。

4　レフェリー・シンポジウムについて

公認レフェリーを対象にして審判技術・審判界をとりまく諸問題の分析・検討

期日　平成5年2月20～21日

場所　青少年総合センター

経費　5000円

5　審判委員会の諸費値上げについて

昨年度合同委員会にて決定され、平成4年度途中に値上げの通知を出したが、その実施時期と金額の確認。

6　JOCカップ・ジュニアオリンピックについて

主旨と本年度の審判団を了解された。

7　本年度海外研修者の報告

バルセロナ・オリンピック報告……………後藤

世界学生選手権大会報告……………後藤・清水

極東大会………浜田・小笠原

◆**審議事項**

1　平成5年度審判委員会事業及び予算

別紙により平成5年度の事業と予算が審議され了承された。

2　平成5年度全日本大会審判割当

平成5年度の全日本大会のレフェリーのブロック別割当を決定した。

・委嘱期間は責任を持って審判に当たってほしい。

・また、責任ある審判員を推薦してほしい。

3　平成5年度A・B級審判員審査会

【A級】

東地区
場所　東京（関東学連新人戦）
期日　6月中旬

西地区
場所　広島（中国一般選手権）
期日　5月21日～23日

【B級】

北地区
場所　湯沢（東北クラブ選手権）
期日　5月4日～5日

東地区
場所　千葉・柏（関東クラブ選手権）
期日　6月26日～27日

中地区
場所　京都（関西学連新人戦）
期日　6月中旬

西地区
場所　佐賀（九州一般選手権）
期日　5月14日～16日

4　全日本大会審判員評価

①第44回全日本高校総体（栃木市）

②第36回全日本教職員大会（豊田市）

③第36回全日本学生選手権（金沢）

5　JHAレフェリーコースの運営

前期　5年8月27～29日・東京

後期　6年3月19～21日・東京

協会だより

1月度常務理事会

1月16日　　於　岸記念体育館会議室

出席　中沢専務理事　他7名

1．平成5年度予算案検討

予算案作成のため各委員会の事業計画及び予算の検討を行った。

（1）審判委員会

ＩＨＦによる国際審判員審査が日本で行われる場合は別途検討

（2）企画委員会

ア、ジャパンカップはＡＨＦの行事計画が確定した段階で検討、開催する場合は特別会計とする

イ、ナショナルチームパンフレットは内容、配布方法等再検討

（3）広報委員会

ア、機関誌の在り方を再検討

イ、カレンダー作成は収益事業として再検討

強化、普及、指導各委員会の予算審議は後日（1月中）に実施する。増収対策は継続して検討、採用可能なものは平成5年度から実施する。以上に基づき予算案を作成、2月度常務理事会で最終審議を行う。　以上

6　IHFルールについて

ルール改正については別紙の改正がIHF広報にて表明されているが、改正の詳細（ルールの条文）がIHFより届いていない。そのためどう取り扱うかが検討されたが、4月1日から新ルールにて実施できるように、取敢えず日本的解釈を加えて実施できるよう対策を練った。

次の箇所に注釈を加えた。

(1) 2－2　公示時計使用の場合、ゲーム終了はブザーで時間になったときになるようにする。ストップウオッチ使用の場合も時間になったら終了の笛を吹く。

「最後の一投」については今までタイムキーパーが誤って吹いてしまった時の処置と同じで「最後の一投」を行う。

(2) 5－1　この項は他の条文と関係の有るところなので　出来るだけIHFより条文が来るまで他の条文を変えない方向で考える。

GKは1・12・16で登録する。

交替はベンチでユニフォームを着替え交替位置からしか交替できない（コート内でユニフォームを替えCP↕GPにはなれない）。

交替GKのユニフォームはゲームベストで良い（但し、相手のユニフォームの色と同色にならないようにすることは同じである）。

(3) 懲罰規定　国際大会においてIHFがプレーヤー・チーム役員・レフェリーに課す出場停止処分は、国内大会には適用しない。

但し、レフェリー・プレーヤー・チーム役員に対する暴力とレフェリーに対する侮辱による出場停止は例外である。

追放・失格の（除く3回目の退場）の懲罰規定

懲罰委員会で協議し即日そのチーム関係者に通知する。

懲罰の内容

・厳重注意
・1試合出場停止
・当該大会出場停止等

懲罰委員会の構成

1　大会委員長
2　競技委員長
3　審判長

（財）日本ハンドボール協会
審判委員会組織図

審判委員長
↓
審　判　委　員　会
↓
副委員長
↓
- 審判総務委員会
- 連盟審判長
- ブロック審判長
- 日本リーグ審判委員会
- ルール研究委員会
- 審判審査委員会

7　審判委員会分掌について

（財）日本ハンドボール協会は当協会の定める規定により各種専門委員会の設置を認めているので、この方向で審判委員会として各専門委員会の検討をした。結果は別掲の通りである。

各地の大会結果

関東

第42回茨城県総合
（11月1日／笠間高校）

〈男子〉

▼1回戦
霞ヶ浦高 19－15 常陽銀行
筑波学園ク 26－16 鉾田一高
日本原子力研究所 16－16 鬼怒清流ク
茨城コンドルズ 25－22 茨城高校選抜
日本セミコンダクター 21－9 波崎高
笠間高 18－12 波崎ク
水海道一高 18－17 利根ク
紫輝ク 21－15 竹園高
守谷高 26－8 動燃東海

▼2回戦
笠間ク 23－17 霞ヶ浦高
茨城フェニックス 23－20 筑波学園ク
茨城コンドルズ 36－11 日本原子力研究所
茨苑ク 25－7 日本セミコンダクター
岩井高OB 15－14 笠間高
水海道一高 30－12 土浦三高ク
茨城大 21－10 紫輝ク
守谷高 20－14 グレートディバーズ

▼3回戦
笠間ク 18－8 茨城フェニックス
茨城コンドルズ 19－10 茨苑ク
岩井高OB 15－12 水海道一高
茨城大 22－12 守谷高

▼準決勝
茨城コンドルズ 28－24 笠間ク
茨城大 24－15 岩井高OB

▼決勝
茨城コンドルズ 34－24 茨城大

〈女子〉

▼1回戦
桜芳ク 13－7 竜ヶ崎一高OG
水海道一高OG 17－5 高萩高OG
水海道二高A 15－12 茨城大

▼2回戦
水海道高B 36－5 桜芳ク
麻生高B 24－5 八郷高
下妻二高 15－5 日立二高
水海道一高OG 12－9 中央高
鉾田二高 18－6 笠間高
水海道一高 14－9 石岡二高
麻生高A 17－11 結城二高
水海道二高A 32－6 土浦三高

▼3回戦
水海道二高B 18－8 麻生高B
水海道二高OG 19－5 下妻二高
水海道一高 25－5 鉾田二高
水海道二高A 29－4 麻生高A

▼準決勝
水海道二高B 15－13 水海道二高OG
水海道二高A 28－10 水海道一高

▼決勝
水海道二高A 28－10 水海道二高B

近畿

第47回国体近畿ブロック大会
（日程、場所不明）

〈少年男子〉

▼予選リーグA
大阪 24－8 奈良
兵庫 17－9 奈良
大阪 20－15 兵庫

▼予選リーグB
和歌山 21－16 滋賀
京都 28－15 和歌山
京都 29－16 滋賀

▼代表決定戦
大阪 31－9 和歌山
京都 19－18 兵庫

〈少年女子〉

▼予選リーグA
大阪 17－8 京都
大阪 18－10 滋賀
京都 13－13 滋賀

▼予選リーグB
兵庫 24－10 奈良
奈良 19－13 和歌山
兵庫 43－13 和歌山

▼代表決定戦
大阪 26－9 奈良
兵庫 19－13 滋賀

〈成年男子1部〉

▼1回戦
京都 29－19 大阪
兵庫 38－26 和歌山

▼2回戦
京都 28－20 奈良
滋賀 36－28 兵庫

▼決勝
京都 34（15－12、19－9）21 滋賀

〈成年男子2部〉

▼予選リーグA
大阪 26－11 奈良
京都 21－19 奈良
大阪 24－12 京都

▼予選リーグB
兵庫 16－15 滋賀
兵庫 25－13 和歌山
和歌山 29－12 滋賀

▼代表決定戦
大阪 42－21 和歌山
京都 34－24 兵庫

〈成年女子〉

▼予選リーグA
奈良 31－9 和歌山
京都 33－9 奈良
京都 39－6 和歌山

▼予選リーグB
兵庫 18－10 滋賀
大阪 34－10 兵庫
大阪 32－14 滋賀

▼代表決定戦
京都 29－20 兵庫
大阪 36－8 奈良

asics®
ATHLETIC SHOES

Barcelona'92

ゴールに狙いをつけた傾斜角。

踏み付け部のエッジ
につけた傾斜が、
倒れ込みシュートを
打ちやすくしました。

コートは狭く、ゴールポストも小さいハンドボール。厚い防御の壁を突き破ってシュートを決めるのは、簡単なことではありません。わずかな間隙をぬって決める倒れ込みシュートこそ、まさにハンドボールの醍醐味です。スカイハンド®ジャパンα-Sは、アウターソール踏みつけ部のエッジに傾斜をつけることにより、倒れ込みシュートを打ちやすくしました。

インドアのために生まれたスパイラルソールが、
すばやい攻撃を支えます。

ハンドボールに要求されるものは、なによりもまずスピード。インドア専用に開発されたラバー製のスパイラルソールがすばやい動きにあわせて威力を発揮します。動きやすく、滑りにくい。しかも、踏み付け部には溝を配し、屈曲性をアップ。攻撃に、防御に、鍛えぬかれたフットワークに磨きがかかります。

品名 **スカイハンド®ジャパンα-S**
品番 **THH711** メーカー希望小売価格 **¥16,000**（消費税抜き）　αGEL
カラー/●ホワイト×Wレッド・マリンブルー ●ホワイト×Wマリンブルー・レッド
サイズ/22.5〜29.0cm

がんばれ!ニッポン!
JGS25-18
アシックスは
オリンピックキャンペーンの
オフィシャルスポンサーです。

株式会社アシックス
●商品についてのお問い合わせは株式会社アシックス消費者相談室までどうぞ。
●®は㈱アシックスの登録商標です。
〒650 神戸市中央区港島中町7丁目1番1 TEL(078)303-2233(専用)・(078)303-3333(大代表)
〒130 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号 TEL(03)3624-1814(専用)・(03)3624-2221(大代表)

スポーツあげたい、
スポーツほしい。
全国共通スポーツ券

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三二八号
昭和四十年六月七日 平成五年二月二十六日
第三種郵便物認可 平成五年三月一日
東京都渋谷区神南一ー一ー一 編集兼発行人
電話 代表 三四八一ー二三六一
振替 東京 六ー五八三四八番
中澤重夫
定価三百五拾円、
(年間購読料三千三百円)